

大宮神社蔵 木造金剛力士立像 応急修理作業報告

～墨書銘および形状比較からみる天台寺との関り～

東北古典彫刻修復研究所

石井智也

1. はじめに

令和4年[2022]9月25日～29日までの4日間、大宮神社拝殿内において金剛力士立像の応急修理を行った(図1)。本発表ではどのような応急修理を行ったのか、その作業内容を報告すると同時に修理期間中において新たに判明した金剛力士像と天台寺との関りについて述べる。

2-1. 金剛力士像とは

仁王、執金剛神、蜜迹金剛など複数の呼称がある。元々のインドの方では釈迦如来の守護神とされ、釈迦の説法の間などを護る。さらに仏法、寺院そのものを守護する役割を持つ。

伽藍の守護神として寺院などの入口にあたる門内に安置されることが多いため、人々の目にも留まりやすく馴染み深い仏像の一つであると言えよう。

この他、健康の象徴として病を治すとされ、金剛力士像に向かって紙礫を投げることで自身の患部と同じ場所に当たると病を癒してくれるといった信仰や健脚の神として崇め、草履を奉納するといった信仰がある。

2-2. 安置場所

金剛力士像の安置場所について基本的に寺院などの入口にあたる門内に安置されることが多いと前述したが、この他にも大宮神社像(図2)などのように拝殿内、外陣といった屋内にも安置されることがある。さらに山形県・遊佐町龍頭寺には本堂入口の軒下に安置されている例もある。

門内に安置されない例についてはもともと門がなかった(焼失など)、門から移ってきたなど様々な事情が考えられる。大宮神社など屋内に安置される場合は本殿の入口、龍頭寺の場合も軒下であるが本堂の入口である。安置される場所は違えども共通して「入口」を守護している。



図1 作業風景



図2 大宮神社拝殿内全体

2-3. 金剛力士像の特徴

大宮神社像(図3)を例に特徴を述べると上半身は裸形で筋骨隆々とした姿、頭頂以外は剃髪し、髻を結び上げる。向かって右に立つ金剛力士像は口を開き、向かって左に立つ金剛力士像は口を閉じているのが特徴である。この口の違いから右の像を阿形像、左の像を吽形像と呼ぶ。

さらに特徴的なことをあげるとすればその構えであろう。阿形像は左腕を大きく掲げて独鈷杵を持ち、右腕は何かを抑えつけるが如くまっすぐ下にさげて、手を開く。次いで、吽形像は左腕を曲げて拳(グーの形)をつくり、右腕を正面に出して五指を伸ばして掌(パーの形)を見せる。全国的に作例の多い仁王であるが、基本的には大宮神社像のような構えをすることが通例である。

金剛力士像と聞くと奈良・東大寺像(図6)を思い浮かべる方も多いことだろう。しかし、その構えは大宮神社像と異なったものになっており、阿形・吽形の安置される位置や向きまでもが違う。これは鎌倉時代に南宋から入ってきた形であり、運慶ら慶派仏師たちによって東大寺南大門の形の像が作られはじめたが、全国的な流行とはならなかった。

2-4. 特異な金剛力士像

現在ではその作例を全国の各地でみることのできる金剛力士像であるが、ここで特異な金剛力士像を紹介したい。それは山形県・庄内町の南野皇大神社仁王門内に安置されている像(図7、8)である。平成26年[2014]年1月から半年の月日をかけて当研究所で修理を行ったものである。

正面から一見するとなんの変哲もない金剛力士像であるが、その特異性は側面から見たときにあらわれる。側面の厚さつまり、像の奥行がわずか8.5cm程である。レリーフとしても現わされる金剛力士像の作例もいくつかあるが、南野皇大神社像の場合、レリーフとも異なる板彫された金剛力士像が台座から独立するという形になっている。どのような意図でこのような形に造像されたかは不明であるが、類例がなく希少性の高い作例の一つである。



図3 大宮神社蔵 金剛力士立像

3-1. 仏像修理について

まず仏像修理というものがどういったものなのか簡単に解説したい。修理を行う場合、「本格修理」と「応急修理」の2種類の方法がある。昨年大宮神社像に行ったのは後者である。

「本格修理」は修理対象の本体、それを支える台座、光背まで全てを解体するなどして、内部からしっかりと修理を行う。この本格修理を行う場合は、一旦安置されている場所から修理工房まで運び出し、最短でも1年程度の期間をかけて修理を行う。特に損傷が激しい状態にある像などが対象である。

一方で「応急修理」は、基本的に現地で行うことのできる簡易的な処置をさす。大宮神社像の場合、阿形像の自立が若干不安定であったが、修理前の調査で十分に現地での作業が可能と考えられたこと、阿形像に対して吽形像はしっかりと自立ができていることから「応急修理」を行うこととなった。

3-2. 大宮神社像の損傷状況

以下に両像の損傷状況を示す。

阿形	吽形
<ul style="list-style-type: none"> ・埃の堆積 ・銹錆の表出 ・矧目の遊離 ・虫喰孔：左前腕、右腕上腕 ・部材の緩み：髻結紐、右足先、持物 ・自立不安定：背面格子への傾倒(右足爪先 2.4 cm 浮く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・埃の堆積 ・部材の緩み：髻結紐、矧目(左肘、右肘、右手首) ・干割れ：正面(面部～裙、3 mm 幅) ・虫喰孔：右腰、背中 ・各矧目の遊離 ・裙左部分柄孔貫通(制作当初のものか)



図4 阿形 部材の緩み(髻結紐)



図5 阿形 虫喰孔



図6 阿形 自立不安定



図7 吽形 干割れ



図8 吽形 部材の緩み(左肘)



図9 吽形 矧目の遊離

3-3. 修理方針

- ・対象の持つ現状の印象を保ちつつ、確認される構造的及び美観的諸問題を解決し、今後の安置に不安のない状態にすることを目的とした。
- ・作業は基本的に安置空間にて、安置状態のまま作業を行った。
- ・各部材の矧目の緩みについては、今後の安置や外観に大きな影響を及ぼしている箇所に関り解体を行い、適正な位置に正した後再接合した。
- ・矧目遊離部、干割れ部については隙間の大きな箇所、外観に大きな影響を及ぼす箇所に関り、処置を行った。
- ・像の歴史性を鑑み、上記処置箇所の表面仕上げについては、周囲に併せて色調を調整し、全体的な現状の印象を保持した。

3-4. 修理作業内容

作業内容を時系列に沿って解説する。

①一部部材の取り外し

脱落の危険性のある部材について、一旦取り外した(図10)。

阿形：髻結紐、持物(金剛杵) 吽形：髻結紐

②背面格子の取り外し

作業開始にさきかけ、両像背面仕切りの格子を一旦取り外した(図11)。

なお当該格子は、所有者の意向により今後も取り外したままの状態とすることとした。

③清掃

両像の表面に堆積した塵埃を、刷毛およびブロアーにて清掃した(図12)。



図10 金剛杵の取り外し



図11 格子の取り外し



図12 清掃



図13 吽形像 左前腕の解体



図14 吽形像 右前腕の解体



図15 吽形像 左裙先の解体

④ 呷形両前腕の取り外し

両肘の繋ぎ目より前腕の取り外しを行った。上腕部と前腕部を仮固定していた布紐を取り外した(図 13, 14)。取り外し後、両部材の接合面および柄孔を水拭きにて清掃した。

⑤ 呷形左裙先の解体

矧ぎ目が大きく離れており、彫刻面の連続に不備が見られたため、これを取り外した。正面、背面、底面に打ち込まれた鋸を取り外し、解体を行った(図 15)。解体後、矧目および柄孔を水拭きにて清掃した。

⑥ 墨書銘の確認 (呷形左裙先柄)

呷形の左裙先柄より下記の通り墨書銘が確認された(図 16)。この墨書銘については詳しく後述する。

⑦ 干割れ箇所への充填作業

呷形本体干割れ箇所(面部正面、胸部、胸部左から腹部、裙中央) 阿形本体干割れ箇所(腹部)に、薄板(桐材、一部に杉材)を膠 50%水溶液で差し込んで接着し、周囲に合わせて彫刻した(図 17, 18)。

⑧ 虫喰孔の充填

両像および両台座の虫喰孔にメチルセルロース 25cp(以下 MC)の 15%水溶液にタブ粉を練り合わせた充填剤を注入した(図 19)。充填剤の乾燥後、周囲の形に合わせて表面を彫成した。

⑨ 阿形自立安定化

裙裾下に仕込む支持体をマツ材で制作し、支持体の上部は別材を矧ぎ寄せ裙裾の形に合わせて彫刻した。接触していた梁から 16cm 程前に上体を起こした位置で支持体を裙裾下に仕込んだ(図 20)。さらに、隙間の生じた左足裏にコの字型の薄板を仕込み、自立を安定化させた(図 21)。



図 16 呷形像 左裙先柄 墨書



図 17 干割れ箇所の充填



図 18 干割れ箇所の充填



図 19 虫喰孔の充填



図 20 阿形像 裙裾支持体



図 21 阿形像 左足裏薄板

⑩部材の再接着

吽形の左前腕は左肘柄孔の不使用方法を埋木した後、柄と接着面にエポキシ樹脂系接着剤(AW106)に木粉を練り合わせたもの(以下エポ木粉)を塗布し、充填接着した。左上腕と前腕にビニール紐を用いて結び、矧ぎ面を圧着した。さらに左肘上部に空いた孔からコーススレッドを入れて固定した。

右前腕は、まず右手先材と前腕材をエポ木粉で接着した。次いで、右肘の柄孔にエポ木粉を塗布した柄を差し込み、充填接着した。さらに前腕の接着面にエポ木粉を塗布して右肘と接合した。固定には左腕同様にビニール紐を使用し圧着した(図 22)。

吽形の裙裾末端は柄孔に木を足し、孔の大きさを柄と同様の寸法に調節した後、柄のみを差し込んでから裙裾を取り付けた。鋸の打ち込み孔を再利用しコーススレッドを入れて固定した。

両像の髻結紐はエポ木粉を接着面に点付けし、接着した。

阿形の持物(独鈷杵)は合わせた矧ぎ面に孔を開け、その孔に竹釘を打ち込み固定した(図 23)。

⑫矧目処理

各部材の接着後、エポに木粉とタブ粉を練り合わせた充填剤を各矧目に充填した(図 24)。

吽形裙裾と左肘上部のコーススレッドを入れた箇所も同様に充填剤で埋めて塑形した。

裙裾末端の鋸孔は埋木し、その周囲を充填剤で塑形した。

⑬色合わせ

干割れ部分に足した木材と充填箇所を周囲の色調に合わせた。色合わせには浄法寺産の生漆に水練りした砥の粉と混ぜ合わせた錆漆を使用した(図 25、26、27)。

⑭作業報告

上記作業の各段階において、管理者側には適宜、進行状況と内容についての報告を行い、最終日には神社及び二戸市の担当者に総括的な報告と、完了状況の説明を行った。



図 22 吽形像 両前腕の再接着



図 23 阿形像 持物固定



図 24 吽形像 肘部矧目処理



図 25 色合わせ



図 26 色合わせ



図 27 色合わせ完了

4-1. 墨書銘の発見と作者について

吽形像の左裙先柄より墨書銘(図 28、29)が発見された。それによると制作は享保十六年[1731]十月十三日、正善によって造立されたことがわかる。

制作者である正善は、現状本像の他に作例を見ることはできない。当時の仏像制作事情において複数の材を寄せて造仏する寄木造りや、さらに複数の小部材を寄せて造仏する箱組と呼ばれる造仏方法が主流となる中で、大胆にも頭体幹部を一本から彫り上げている。顔や胸部などの隆起する筋肉表現、裙の複雑な衣文表現などは破綻なくまとめられ、実に優れた彫刻技術である。

墨書銘の正善の前に「刻彫桂泉」とあることに注目したい。「桂泉」とは同市内の天台寺を差す。天台寺は平安時代後期頃から確実に成立していたとされる寺院(寺伝では神亀五年[728]行基開山)で、古代最北の仏教文化の中心地とされていた。天台寺は「桂泉観音」と呼ばれることが一般的であり、萬治元年[1658]南部重直が天台寺の伽藍を再興した際の棟札には「天台寺」の寺号は全く書かれておらず、「桂泉観音堂」のみが書かれている。

このことから吽形裙先柄の墨書銘にある「刻彫桂泉正善」の「桂泉」は天台寺を差し、正善の出自は天台寺に関係する人物、または仏師であることに違いない。

4-2. 棟札の銘文について

同社には享保十七年[1732]九月に拝殿建立し、仁王像を造立したとする棟札が存在する。左裙先柄に書かれた年号はこの棟札よりも一年ほど下る。この銘文の年数の違いから、享保十六年に仁王像が完成し、その翌年に拝殿の完成に合わせて仁王像を奉納したと推察することができる。

さらに興味深いことにこの棟札(図 30)から「奉書写大般若理趣分一卷力士御腹籠」と記された箇所がある。「力士」とは金剛力士像のこと差し、「御腹籠」とは腹部に納めたと解釈できる。つまり、延命地藏菩薩経と大般若経が腹部に入っているということになるが、両像の腹部には納入物を入れることのできる空間は存在しない。昨年の修理事業中には確認できなかったが、裙の背面や側面に小材を足して塞いだかのような形跡があることから両像の内部に何らかの納入物を納めている可能性はあり、X線透過撮影による調査を行うことができれば、金剛力士像についてさらなる情報が発見できるのではないかと考える。

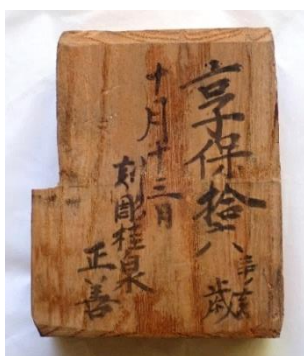


図 28 吽形 裙先柄 墨書

享保拾六
辛ノ亥
十月十三日
刻彫桂泉
正善

図 29 判読文

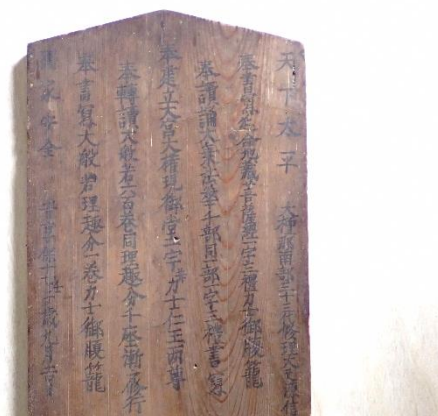


図 30 大宮神社蔵 棟札(一部拡大)

5-1. 吽形像と阿形像の比較

正善によって制作された吽形像であるが、ここからは阿形像と比較し作風の相違についてみていきたい。まず、両像のプロポーションは、細く引き締まった体軀、大きく隆起する肩などが共通している。しかしながら、細部表現を比較すると異なる箇所がいくつか確認できる。以下にそれらをまとめる。

髻の側面		髻結紐	
吽形	阿形	吽形	阿形
			
渦巻状の髪	省略化	曲線を描きながら 左右に伸びる紐	真っ直ぐ 左右に伸びる紐
耳の形		裾の折り返し	
吽形	阿形	吽形	阿形
			
輪郭は大きな弧を描く 耳朶が小さい	輪郭は半ばで絞られる 耳朶が大きい	小さく折り返す 複雑な衣文表現	大きく折り返す 簡略した衣文表現

以上のように両像を比較すると吽形が細部にまで手が加えられており、阿形は形を省略化また簡略化した表現が目立つ。阿形の省略化した表現は髻だけでなく、背面にも見ることができ両肩口から背中へ繋がる矧目で明らかな目違いを起こしており、彫刻面の連続に不備がある。つまり吽形と阿形とで作風が明らかに異なっているのである。

ここからは想像の域を出ないが、細部まで彫りこむ吽形と形を省略化する阿形の形の違いから吽形の制作を左裙先柄の銘文の正善が担当し、阿形の制作を正善の弟子たちが担当したのではないであろうか。細部に違いがあれ、プロポーションやバランスなど大まかな形に違いが認められないため、阿形の制作に正善と全く縁のない別の人物が関わったとは考えにくく、やはり弟子などの正善と近い人物が関わったと考える。



図 31 阿形 右腕背面 目違いの矧目

5-2. 天台寺像との比較

前述の通り作者の正善は天台寺に関係する人物であることと推測できる。これに加え本社には、本像が天台寺の仁王像の模刻像だとする言い伝えがのこる。そこでここからは本像と天台寺像を比較し、検討する。まず吽形像(図 32、33)を比較すると、両腕の構えが共通する他に細身の引き締まった体軀、大きく隆起する肩、裙裾の長さまでもが共通している。しかしながら本像は顔を正面に向け、腰を捻らないのに対して、天台寺像は顔を左に向け、腰を大きく左に捻っているなど異なる点も確認できる。

次いで阿形像(図 34、35)を比較すると、吽形と同様に細身で引き締まった体軀、大きく隆起する肩、裙裾の長さ、上体を右に大きく傾ける角度が共通している。しかしながら、本像の両脚はほぼ均等に開くの対

して、天台寺像は左脚を後ろに引き、右脚を前に出しており今にも歩き出す勢いである。形状の比較から全くの瓜二つと言うには無理があるが、両像ともに共通する表現がいくつか確認された。

続いて構造と法量を比較する。構造は本像と同様に頭体幹部を一材から彫り出し、両腕と両足先などは別材を矧ぎ寄せている。構造に関しては共通すると言えよう。

法量(cm)は以下の通りである。

	吽形 像高	阿形 像高	吽形 腹奥	阿形 腹奥
大宮神社	229.3	234.2	35.5	36.6
天台寺	252.0	265.0	50.0	45.0

比較すると天台寺像が本像よりも30cm前後大きい。また腹奥などの奥行を比較しても15cm前後大きいことから天台寺像は本像よりも一回り太い材木から彫出されたことがわかる。両阿形像の比較において両脚の開き方が異なる点に触れたがこれは材木の大きさの制約により、天台寺像のような足を大きく前後に踏み込んだ形にあらわすのが困難であった可能性がある。

以上、本像と天台寺像を形状、構造、法量から比較を行った。結果、大まかな形状が天台寺像に通じている点、同様の構造をしている点、天台寺像の大きさに近い大きさで造立している点から本像が天台寺像の模刻像だとする説を否定することはできない。また、吽形の作者正善は天台寺関係の人物であることから本像と天台寺像との関係性は十分にあり、本像を造立する際、天台寺像を参考にしたと考えることの、より強い根拠となる。



図 32 大宮神社蔵 吽形



図 33 天台寺蔵 吽形



図 34 大宮神社蔵 阿形



図 35 天台寺蔵 阿形

6. 結

これまでの内容をまとめると以下のようになる。

- ①金剛力士立像の制作は天台寺に関係の深い正善によるもので享保十六年[1731]十月十三日に完成。翌年の享保十七年[1732]九月に本社へ奉納された。
- ②阿吽両像は大まかな形は共通するものの、細部表現に異なる箇所が認められることから吽形は正善が造立し、阿形については弟子などの正善に近い人物である可能性がある。
- ③天台寺像の模刻像だとする本像はその共通点の多さから天台寺像を意識して造られたと考えられる。作者が天台寺出自であることから本像と天台寺像との関係性を補強できる。本像は当時の大宮神社と天台寺との深い関係性を示す史料として重要な作例である。
- ④本像の造形には単なる模作の域を超えた、極めて近代的な作家的意識の高い感覚が認められる。これは、例えば耳朶等の細部表現の的確さに見られる様な、高い技術に裏付けられた上でのものである。地方における、この年代の注目すべき優品として位置付けられると言えよう。
- ⑤また、本像は制作後三百年を経ているにもかかわらず、長期にわたり外気に晒された形跡が認められない。制作後の当初から、山門などではない拝殿内部に安置されていた可能性が高く、安置状況と取り扱いの面から、宗教上の神仏の自然な融合が垣間見え、極めて興味深い事例である。

最後に本事業において吽形の左裙先柄から作者が判明したように、阿形の裙先柄や内部になんらかの銘文がある可能性は充分にあると考えられるため、納入品の確認も合わせて今後エックス線分析の科学的調査研究に期したい。

いずれにしても堂々とした像容や天台寺との関係が認められることなど、本市の歴史文化を窺う貴重な文化財であることは疑いない。

今後も下斗米地区の皆さんはじめ市民の宝として末永く保存継承されることを願う。